

# “Ripeness” への道

—*King Lear* の一考察<sup>(1)</sup>—

杉 本 和 世

## I 序

*King Lear* における顕著な表現として含蓄の深い疑問文の反復があげられる。特に主人公は執拗に問を發する癖を持っている。この劇の一主題を Lear が “Ripeness” へ至る learning process に求める時、疑問文の反復というこの表現は注目を浴びてくる。Lear の内的發展を示す一方法として、真実追求という learning process の、普遍的、根本的な方法である疑問応答の形が用いられたと考えてよいだろう。

それに、*King Lear* をはじめ四大悲劇が執筆された頃は中世から近世への過渡的混乱期であり、既成概念が根底から疑われ始めたという事情を考えると、この劇に現われる疑問文が一層重要性を増す。

そこで、Shakespeare 当時の時代精神と関連づけながら、従来断片的にしか触れられなかったこの劇の疑問文<sup>(2)</sup>を劇の全体的統一において考えることによって、Lear の learning process を迎るのが本稿の目的である。

## II Lear, a pupil

—Which of You Shall We Say Doth Love Us Most

1) *King Lear* 展開の発端となる王国分割場において、Lear が言おうとする事は彼の第一疑問文<sup>(3)</sup>に要約される。

Which of you shall we say doth love us most,

That we our largest bounty may extend  
Where nature doth with merit challenge.

(I. i. 50-52)<sup>(4)</sup>

この疑問文は Lear の成長過程の出発点であり、劇の進行上の準備、暗示となっている。

ここで注意をひくのは巧みに挿入された、“shall we say”の三語である。Lear は愛の表明を求めるのみならず、自己の全存在をこの間に賭けている。この間はまた質問の性格を持った普通の疑問文というよりも、認識を深めるには最も不適当な命令文の要素が濃厚である。しかも、この場における Lear は極めて稀にしか問を発しない。彼は真の対話を行ない得ず、事前に答を決めてしまっている<sup>(5)</sup>。従って、この威圧的な問に対する Cordelia の答、“Nothing (I. i. 86)”の中に、everything である王者としての彼の存在の否定しか見出さず、“Nothing? (I. i. 87)”という憤激に満ちた問を聞き返す。王国分割場での Lear の言葉は命令、脅迫、呪詛、及び、混乱した心をうかがわせる感嘆文めいた疑問文を特徴としている。こうした疑問文に代表されるように、無思慮な Lear は自己についての認識を欠く、unpromising old pupil と言える。“he hath ever but slenderly known himself. (I. i 290-291)”というのが、彼の状態である。当時、‘know thyself’という Socrates の言葉を知らない者は無教育な田舎者に考えられたと言う<sup>(6)</sup>。尊敬を一身に浴びて静かな余生を送るのを期待していた Lear は、自己の真の姿を知るために厳しい試練、即ち、learning process を経なければならぬ。劇を通じて終始変らない Kent に倣って、“I am too old to learn (II. ii. 125)”と言うことは彼には許されないのである。

2) Shakespeare の後期作品は allegory の要素を強く持っており、当時 morality plays の伝統が依然残っていた事実を考えあわせると、Lear は典型的な Mankind に似ている。また、物事を一般的様相において考える習慣にあった Elizabeth 朝人にとって、自己についての Lear の疑問は、一老人とい

う範囲を越えて、人間の本質に関する問題を呼びおこしたと思われる。Lear は自己及び人間についての真実を追求する人類の代表者としての性格を持つようになる。

3) Lear の第一疑問文は更に別の角度から考えられる。人間に最も必要なものをいかにすれば賢明に選び得るかという問題がこの疑問文によって提示される。あらゆる方面において ambivalence を特徴としており、新旧対立する価値観が争っていた Shakespeare 当時、この問題は緊急な性質を持っていたと思われる。対立は個人に対して二者択一を迫るからである。

第一疑問に対して、Lear が色好い返事を得ようと期待している人物は Cordelia である。

Cordelia への問、

Now, our joy,

Although our last and least, to whose young love

The vines of France and milk of Burgundy

Strives to be interested, what can you say to draw

A third more opulent than your sisters? Speak.

(I. i. 81-85)

は、第一疑問とほとんど変わっておらず、Lear が必然的に誤った選択に陥る過程を示している。真の愛を渴望しているにもかかわらず、物質に価値を置く Lear は、愛には相当の報酬が支払われなければならないと考える。彼は King of France と Burgundy を “marriage market”<sup>(7)</sup>における商人のように扱っている。一幕一場、特に Lear と姉娘達の台詞には、数量、取引、賭事に関する語が多い。Lear の意にかなう返事は、愛を物質に換算する姉娘達だけができる。彼女達は “love” という語を “appraise, estimate the price or value” の意味<sup>(8)</sup>に用いて、Lear を欺くことに成功する。一方、Cordelia の答——数量概念を含まず、愛を言語に表現し得ない “Nothing”, 及び、その synonym と考えられ、存在の絆を暗示する, “love.../According to my bond, no more

nor less (I. i. 91-92)” という潜在力に富んだ言葉——の内に含まれた愛の意味は Lear には解らない。独占欲を顕にし、感謝の答を期待した問を用いる Lear にとって、Cordelia の答は彼の存在の否定のみならず、数量的零を意味するのである。この “Nothing” という語が *King Lear* 解釈上の鍵となっていることは周知のとおりである。一幕一場、及び、二場は真の愛の選択という問題を一つの中心として展開していると考えられる。

以上見てきたように、一幕一場における Lear の疑問文、特に第一疑問からは三つの問題、即ち、self-knowledge, the nature of man, prime need and wise choice が派生する。命令の響きが強いのこの疑問文は Lear の learning process の第一段階を締めくくっており、“Ripeness” に至る Lear の道程の基礎となっている。視覚への言及が多いこの劇において Lear は最初すべてに對して盲目の状態にある。

### III Lear's Self-knowledge

#### —Who Is It That Can Tell Me Who I Am?

この劇の complication は An enemy (adversity) makes a man know himself という当時の諺が示すように、Lear に対立し、severe tutors となる antagonists の登場をもって始まる。ここで Lear は発想基盤が彼と全く異なる姉娘達の陣営と衝突し、錯乱、自問の経過を迎ることになる。王国分割場の Lear の精神と行動を特徴づけていた表現はもはや許されなくなる。

まず Goneril の執事、Oswald が Lear の権威を真向から否定する。Oswald の不服従に驚きながらも Lear は問う。

Who am I, sir? (I. iv. 79)

予期に反した答、“My lady's father (I. iv. 80)” は question mark, exclamation mark, いずれの punctuation をも可能とする台詞を Lear からひき出す。

‘My lady's father,’ my lord's knave?

You whoreson dog, you slave, you cur! (I. iv. 81-82)

このような性質の間は、姉娘達が代表する現実世界と Lear の世界——個人主義と闘争が根本原理である世界と、王を頂上とする位階社会——との激突、そこからくる Lear の混乱を反映している。Lear の精神を形造ってきた中世的世界観が抬頭してきた近世的世界観と直面する時、Lear の足場は危うくされるのであり、彼は自己の identity を根本から疑わねばならない。Lear の悲劇は人生の終りに近づいて初めてこうした体験に出会わなければならない点にある。

次いで Fool も命令文の性格を持った Lear の間に応じない。彼は無遠慮な批判を許される特権を利用し、Lear に質問することによって tutor としてふるまう。Fool と Lear が交す問答は、Shakespeare 喜劇において道化と他の characters の間に見られる問答と異なって、単なる機知問答に終らないところに問題がある。Fool の問答は一見無意味であるが、前後呼応して深い含蓄を帯びる。たとえば、Lear の問、

Where's my fool? (I. iv. 49)

は、Fool が Lear に言う、

Nuncle Lear, nuncle Lear! Tarry; take the fool with thee. (I. iv. 316-317)

と考えあわせる必要がある。Fool は “Take the epithet ‘fool’ with you when you go.” と告げているとも思われる<sup>9)</sup>。“fool” と “wise” の antithesis が特徴であるこの劇において、自分を “wise” であると信じて疑わない Lear に対して、Fool が辛辣な批判を与えるのは ironical な効果を持つ。Lear の愚かさを指摘するために Fool は問い、疑うのである。そこで Lear は

Dost thou call me fool, boy? (I. iv. 149)

と尋ねる。更に、Fool は人間社会の最高位の幻を棄てきれない Lear を次のように裁断する。

now thou art an O without a figure. I am better than thou art now; I am a fool, thou art nothing. (I. iv. 192-194)

Fool の前にいる Lear は

Lear's shadow! (I. iv. 231)

にすぎない。Shakespeare 劇において有名な shadow-substance contrast が見られる *Hamlet* では、王侯は shadow, 乞食は substance とされている。“shadow” は substance なしには存在し得ない。ここで Lear の存在は全く否定される。王国分割場において “Nothing” という Cordelia の答の中に感じた意味を、ここで彼は痛感しなければならぬ。

Lear に現実を認識させる tutor としての役を姉娘達に譲ると、Fool は Lear に問うのをやめる。Goneril の計画, “I'd have it [i.e. negligence of Lear] come to question. (I. iii. 14)” は今後の Lear の道行となる。Lear の命令的な疑問文, “Where's my daughter? (I. iv. 45)” に対し, Regan とともに彼女は Lear が期待する “better answers (II. iv. 88)” を与えないのである。有無を言わせない rhetorical question と命令文を用いることによって、姉娘達は Lear の “place (II. iv. 11)”, “state (II. iv. 108)” に侮辱を加えようとする。老齡を老衰, 毫碌と synonym に解釈する Goneril に思わず Lear は尋ねる。

Are you our daughter? (I. iv. 219) (下線は筆者)

Your name, fair gentlewoman? (I. iv. 236)

この疑問文を境として Lear の台詞に見られる 散文から韻文への突如の変化の中に、Lear が受けた衝撃の程がうかがえる。Lear の間は姉娘達との緊張した対決場面に最も多く現われる。悪一色の character に造りあげられた姉娘達と Lear の対決は、反応し難い old pupil に加えられる苦しい体験を強めている。“this tough world (V. iii. 314)” の中に投げ出された Lear は、不安と当惑を混じえ、自己に対する疑惑の間を吐くに至る。

Does any here know me? This is not Lear.

Does Lear walk thus, speak thus? Where are his eyes?

Either his notion weakens, his discernings

Are lethargied—Ha? Waking? 'Tis not so?

Who is it that can tell me who I am? (I. iv. 226-230)

命令文に訴え、対等のやりとりを拒む暴君としての Lear より、問い尋ねる Lear への前進がここに示されている。彼が“Ripeness”へ向う最初の一里塚と言え。台詞が肯定文ではなく、感情を喚起し易い疑問文になっていることは、劇の中心問題を明示する上で重要である。以後この問は Lear の obsession となり、劇を通じて反復される。

このような展開を見せる質問応答に対して、complication 当初にある Lear と Kent のやりとりは予言的性格を持つ。変装によって“nothing (II. ii. 21)”となった Kent に、Lear は無意識のうちに尋ねる。

What art thou? (I. iv. 10, 19)

Dost thou know me, fellow? (I. iv. 27)

重要な問への序曲の役割を果たす問を前もって設ける手法は、劇を動かす character の登場前に幾度も言及することによって、心的準備を与える技巧に通じる。

Kent への問には Lear の悠長な自信、Oswald への問には王の誇りを傷つけられた憤激、そして、Fool への問には少なからぬ驚きが見られ、最後に娘達に悲憤と絶望をもって Lear は自己とは一体いかなるものであるかを問い質す。Lear が各 character に向ける問の中に彼の心の微妙な変化が反映されている。

しかし、依然として自己主張のための呪いや復讐の swearing を吐き、大きな進歩を遂げられない Lear を普通的手段で教化することはできない。最後の抱所とする神々の怒りを彼が姉娘達の上を求めるや否や、嵐が聞こえ、神々そのものが悪意ある敵になるという最も皮肉で残酷な答が返ってくる。夜の嵐の中へさ迷い出て行く Lear 一行を見て、Regan は指摘する。

The injuries that they [i.e. Lear and his followers] themselves procure

Must be their schoolmasters. (II. iv. 229-300)

Shakespeare 悲劇の主人公が劇の流れにおいて転換する時、彼らはしばしば元素や神々の力に呼びかけるが、この劇においても、嵐の場は Lear の learning process の上で重要な turning point になっている。彼の命令が意にかなう返事を得ることができなくなるに従って、Lear は真実を悟るようになる。“poor, infirm, weak and despised old man (III. ii. 19-24),” “unaccommodated (III. iv. 107) poor naked wretches (III. iv. 28)” となった自己の姿を Lear は認識するに至る。

一方、外界の嵐と呼応した比喩，“this tempest in my mind (III. iv. 12)” に見られるように、嵐と狂気の場においては彼の心はなおも一進一退を繰り返す。Cordelia からの使者が Lear を迎えに来た時の彼の問、

I am a king, masters, know you that? (IV. vi. 198)

は、最初の tutor となった Oswald に対する問と比較すると、自己主張、王侯意識において何ら変化がない。この問は、Cordelia との再会直前における Lear の最後の問であることに注意したい。

次の場において、Lear は回復力を与える静かな眠りから目覚める。彼の心の嵐が終った今、音楽が奏でられる中を、“fresh garments (IV. vii. 22)” を身につけて Lear は登場する。Shakespeare 劇において音楽は常に愛、調和と結びついており、嵐と対立関係にある<sup>(10)</sup>。また、Elizabeth 朝演劇では、新しい衣服はしばしば生れ変わった人間を意味する<sup>(11)</sup>。Lear は改めて自己の identity を問う。

Where have I been? Where am I? Fair daylight?  
I am mightily abused; I should e'en die with pity  
To see another thus. I know not what to say.  
I will not swear these are my hands: let's see;  
I feel this pin prick. Would I were assured  
Of my condition! (IV. vii. 52-57)

Lear の間に突然現われた明るい image, “Fair daylight” は彼が清浄な世界へ救出されたことを反映している。彼は Cordelia の前に跪き、自分自身の問に答える。

I am a very foolish fond old man,  
 Fourscore and upward, not an hour more nor less;  
 And, to deal plainly,  
 I fear I am not in my perfect mind.  
 Methinks I should know you, and know this man,  
 Yet I am doubtful: for I am mainly ignorant  
 What place this is; and all the skill I have  
 Remembers not these garments, nor I know not  
 Where I did lodge last night. Do not laugh at me,  
 For (as I am a man) I think this lady  
 To be my child Cordelia. (IV. vii. 60-70)

彼の台詞, “not an hour more nor less” は第一の問, “Which of you shall we say doth love us most” に対する Cordelia の問, “Nothing” と “love ... / According to my bond; no more nor less” を反響している。彼が唯一の聡明な審判官であるという自負はここでは消えている。Cordelia に会って始めて彼は静かな諦観に達するのである。

以上のような経過を示す Lear と他の characters との質問応答は、長い遍歴の末に自己のありのままの姿を知る Lear の内面劇を形造っている。

#### IV The Nature of Man

##### —Is Man No More Than This?

この劇の舞台が広がるにつれて Lear の疑問文は一般的な様相を持つようになる。嵐という最も苛酷な tutor によって自分がどんなに弱い者であるかを教えられた Lear は、肉体的苦難を彼とともにする人々に思いをはせる。

Poor naked wretches, whereso'er you are,

That bide the pelting of this pitiless storm,  
 How shall your houseless heads and unfed sides,  
 Your looped and windowed raggedness, defend you  
 From seasons such as these? (III. iv. 28-32)

この問はまさに “poor naked wretches” の一人である Tom に変装した Edgar によって答えられ、Lear の注意はどん底に落ちた人間にそそがれる。Lear にとって Edgar の姿は悪意ある嵐への答であると思われる。

Thou wert better in a grave than to answer with thy uncovered  
 body this extremity of the skies. (III. iv. 101-102)

最初 Lear は個人的感情から Edgar に問う。

Didst thou give all to thy daughters? And art thou come to this?  
 (III. iv. 48-49)

しかし、Bedlam 乞食を装った Edgar が、Lear のこの問に切掛を得て行なう嘆願、“Who gives anything to poor Tom? (III. iv. 50)” は忘恩の娘を持つ父親一般に対する問、

Is it the fashion that discarded fathers  
 Should have thus little mercy on their flesh?  
 (III. iv. 71-72)

そして、最後に、

Is man no more than this? (III. iv. 103)

という、単音節からなる最も一般化された問を Lear から導き出す。Poor Tom の登場によってこの劇は一つの重要性を加えられている。人間は弱い動物でしかないという Lear の認識を具現化したのが Tom である。

Consider him well. Thou ow'st the worm no silk, the beast no  
 hide, the sheep no wool, the cat no perfume... thou art the thing  
 itself. Unaccommodated man is no more but such a poor, bare,  
 forked animal as thou art. (III. iv. 103-108)

Tom は “what am I that have nothing?” という個人的な問を、“what is

man that is unaccommodated?” という一般的な問に発展させる誘因となっている。Poor Tom は Lear を地上の現実の核心へと連れこむのである。人間一般についての Lear の内省は、理想の人間と実際の人間の著しい相違について Renaissance 人が感じていた疑惑である。

Tom との出会いを機として、受身的な Lear から積極的な Lear、即ち、自暴自棄で専制的な Lear から真実を追求するために悶え苦しむ Lear への変化が見られる。

What hast thou been? (III. iv. 83)

という Lear の問に対し、seven deadly sins を犯した人間であることを動物の image によって語る Tom の答は、不正と色欲にかたまった人間の腐敗を暴露する。

更に Lear は Tom を “philosopher” に見たてて、根源的な問をする。

First let me talk with this philosopher.

What is the cause of thunder?

.....

I'll talk a word with this same learned Theban.

What is your study? (III. iv. 154-158)

意志疎通を欠く命令に拠っていた Lear はこれより後さかんに X-question を用いるようになる。当時、Fool と同じく王侯に抱えられていた “philosopher” は、対話、あるいは、教義問答の形で王を教化啓蒙したという<sup>(12)</sup>。Lear の learning process において、Tom は Fool に劣らない機能を果している。Tom に会う機会がなければ、Lear は人間の悲惨、腐敗に盲目であったろう。

Fool の問、

Why one's nose stands i' th' middle on's face? (I. v. 19)

に対して何ら返答をできなかった Lear は、苦悩という tutelage の下で問を発することによって、人間の真の姿を発見し、「嗅ぎ出す」のである。質問応答に基づく模擬裁判の場において、

A man may see how this world goes with no eyes. Look with  
 thine ears: see how yond justice rails upon yond simple thief. Hark  
 in thine ear: change places and, handy-dandy, which is the justice,  
 which is the thief? Thou hast seen a farmer's dog bark at a beggar?  
 ... And the creature run from the cur? there thou mightst behold  
 the great image of authority—a dog's obeyed in office.

Thou rascal beadle, hold thy bloody hand!

Why dost thou lash that whore? Strip thy own back;

Thou hotly lusts to use her in that kind

For which thou whipp'st her. (IV. vi. 149-162)

と歪んだ現実社会を告発した Lear は悟る。

When we are born, we cry that we are come to this great stage of  
 fools. (IV. vi. 181-182)

この劇は “What is man?” という問に対する dramatic answer である。

## V Wise Choice and Prime Need

—Do You See This? Look on Her! Look—Her Lips!

Lear の王としての存在が否定される過程は、同時に彼の価値基準が破壊される過程でもある。王国分割場において、Cordelia を競売品に出した Lear は、姉妹達と対決するに及んで、彼にとっては象徴的な意味を持つ騎士の取引を迫られる。Lear, Goneril, Regan が騎士の数をめぐって烈しい問答合戦を行なう場面は “bargaining scene” と名づけてよいだろう。 “necessity / Will call discreet proceeding (I. iv. 213-214)” として、 “one hundred” から “fifty”, “five and twenty”, “ten”, “five”, そして、遂に一人の騎士の必要もないと、姉妹達は Lear を追求する。ここに至って prime need の問題が劇の中心主題として表面化してくる。

こうした経験, “by the art of known and feeling sorrows (IV. vi. 220)” から, Lear は “pregnant to good pity (IV. vi. 220)” となることを学ぶ。

Poor naked wretches, whereso'er you are,  
 That bide the pelting of this pitiless storm,  
 How shall your houseless heads and unfed sides,  
 Your looped windowed raggedness, defend you  
 From seasons such as these? (III. iv. 28-32)

彼の叫び，“O, I have ta'en / Too little care of this [i.e. poor naked wretches under pitiful condition] (III. iv. 32-33)!” は、所有物をすべて与えてしまったという後悔と鋭い対立関係に立つ。

しかし、ここで注意しなければならない事がある。彼の同情心の中に一種の実利説が感じられはしないか、それは彼自身が肉体的物質的安楽を奪われたために生れた気持ではないかということである。上の引用文において、家に関連する image——bare heads の代りに “houseless heads”, tattered clothes の代りに “windowed raggedness” が用いられている——は注目に価する。Lear がいう need とは物質第一主義をとる思考法から発したものに他ならない。Lear への批判の 2/3 において、Lear が退位後も所有しておくべきすべてのものを与えてしまったという愚行を指摘する Fool が Lear に伴っている限り、数量意識——金銭、騎士への数多い言及——と姉娘達に復讐しなければならないという気持が Lear の念頭から離れない。Lear に対して Fool が言う，“thou art nothing (I. iv. 194)” は、Cordelia の nothing と全く異質のものと考えられる。彼の “nothing” は “an O without a figure (I. iv. 192-193)” を意味し、Lear の考え，“Nothing will come of nothing (I. i. 89)” と同じ発想によるものである。

Goneril と Regan から騎士の数を減らすように迫られた Lear は叫ぶ。

O reason not the need! Our basest beggars  
 Are in the poorest things superfluous.  
 Allow not nature more than nature needs,  
 Man's life is cheap as beast's. (II. iv. 260-263)

彼は Tom のような “poor naked wretches” になるのを恐れている。しか

し、人間と動物を区別する最後の拠所であると考えられる、衣服という物質的必要物さえも現実の人間は奪われている。衣服を身につけていることは“sophisticated (III. iv. 106)”であるように思われる。では、“thing itself (III. iv. 106)”であり、“a poor, bare, forked animal (III. iv. 107-108)”, また、fool of “this great stage (IV. vi. 182)”である人間にとって真に必要なものは何か。自己と自己を含む人間についての認識を得た Lear に必要なものは何か。ここにおいて、“who am I?”, “what is man?”, “what is need?” の三つの問題が緊密に結びつく。一つの間は別の間を誘発するのである。この間に対していかなる答も与え得ない Fool は退場する。

prime need の問題に対し、Shakespeare は巧みな技巧によって充分な答を与えている。再会直前の場面において、再び Lear は自暴自棄の考えと復讐への要求に駆りたてられる。その瞬間、Cordelia に遣わされた紳士と従者が Lear を見つける。姉娘達に対する復讐戦で囚の身になったと勘違いした Lear は問う。

No second? All myself? (IV. vi. 193)

これらの間は Cordelia によって答えられるのである。Lear はもはや一人ではない。彼は世俗的所有物を剥奪されて初めて“nothing”が意味する没我的愛を把握選択するに至る。真実への洞察は愛と結びついた時、完全な上昇運動に到達する。醜悪な現実への認識、復讐や世俗的富への要求から真の愛の選択、新しい価値観へと Lear を導くのは Cordelia である。

しかし、Lear の物語はここで終るのではない。最終幕は一度愛を得た Lear が antagonists の支配する“this tough world (IV. iii. 314)”にいかに対処するかを示している。Lear が再び舞台に現われる時、Cordelia とともに Edmund 軍の捕虜となっている。Cordelia と愛の絆で結ばれる前には、彼は錯覚をおこして尋ねた。

No rescue? What, a prisoner? I am even  
The natural fool of Fortune. Use me well;

You shall have ransom. (IV. vi. 189-191)

しかし、今や、戦いの結果は Lear に何ら影響を及ぼしていない。彼は進んで牢獄へ行く。Cordelia の問、“Shall we not see these daughters and these sisters? (V. iii. 7)” すら彼は超越している。

Come, let's away to prison:

We two alone will sing like birds i' th' cage;  
 When thou dost ask me blessing, I'll kneel down  
 And ask of thee forgiveness. So we'll live,  
 And pray, and sing, and tell old tales, and laugh  
 At gilded butterflies, and hear poor rogues  
 Talk of court news: and we'll talk with them too—  
 Who loses and who wins, who's in, who's out—  
 And take upon 's the mystery of things,  
 As if we were God's spies; and we'll wear out,  
 In a walled prison, packs and sects of great ones  
 That ebb and flow by th' moon. (V. iii. 8-19)

彼は虚飾に輝く宮廷生活を退ける。彼の存在の拠所となる真の愛の持ち主である Cordelia さえいれば、Lear は心満ちるのである。

Have I caught thee?

He that parts us shall bring a brand from heaven  
 And fire us hence like foxes. (V. iii. 21-23)

彼は殺されるのを恐れているのではなくて、Cordelia から離されるのではないかと不安を感じているのである。“bond”を連想させる彼の問と第22行の“part”という語は、catastropheを考える上で決定的な意味を持っている。

Lear の問が、不吉な予感となるかのように、Shakespeare はこの劇のどの種本にも反して、あえて Cordelia を殺して Lear から別れさせている。再び苛酷な現実が強調され、Cordelia の愛と対等の力関係に置かれる。今、Lear は Cordelia の屍を抱いて、人間を呪いながら登場する。愛を奪われて逆もどりした Lear を先行場面との対照のうちに提示しているのが、この場面である。

しかし、Lear の呪詛はその本質において、王国分割場面や嵐の場面におけるのと異なっている。

愛がなければこの世は動物の世界に等しい。むしろ、それ以下でさえある。

Why should a dog, a horse, a rat have life,  
And thou no breath at all? (V. iii. 306-307)

質問を重ねることによって、自己と自己を含めた人間を知った後の Lear が吐く最も悲愴な問がこれである。この問において三つの問が再び凝縮される。なぜなら、Cordelia の愛のみが、動物の image によって現わされる冷酷、貪欲、色欲の世界に生きる人間と真の人間の間境界線をひくのである。

Lear の最後の問は、Shakespeare が、なぜ Lear を以前の状態に置いたかを理解する糸口を与えてくれる。Lear は Cordelia の声を聞こうとする毎に希望を空しくする。が、遂に、彼は彼女が生きていると信じて息をひきとる。

Do you see this? Look on her! Look—her lips!  
Look there, look there! (V. iii. 310-311)

Lear のこの最後の台詞は彼の長い遍歴の終着点である。再び “this tough world” に晒されても、Lear は prime need である愛を選んだという信念を持ち、“Ripeness” のうちに死出の旅に立つのである。Lear と同じような彷徨を経た Gloucester に “Ripeness is all (V. ii. 12)” と Edgar が言うのは、姉妹達との戦に敗れた後である。morality plays の善悪天使の人間争奪戦に倣って、主人公 Lear をほとんど二群に分かれる allegorical characters の間に置き、一方の極から他の極へ移動させることにより、Shakespeare は old pupil の経た過程を劇化するのに成功している。

## V 結

以上考えてきたように、Lear が他の characters と交す問答の中に、彼の内的変化、認識態度の変化が顕著に現われている。疑問文の反復はこの劇におい

ては, key word, recurrent imagery, families of words, その他の劇構成要素と有機的に関連して, 相互活性化をはかり, 続く場面や行為への準備となっている。

Lear の問は当時の人々の関心事であった問題を中心に, 三つの pattern——Lear's self-knowledge, the nature of man, wise choice and prime need——を描きながら発展し, 全体的効果において Lear の learning process という主題を提出しているといえよう。

#### 註

- (1) 本稿は昭和44年1月に提出した修士論文に準拠しつつ, 4月の名古屋大学英文学会第9回総会で改めて発表したものに一部補筆したものである。
- (2) この劇における疑問文の意義は W. M. T. Nowotny, "Lear's Questions," *SS*, X(1957), 90-97, ついで, Manfred Weidhorn, "Lear's Schoolmasters," *SQ*, XIII (1962), 305-316 によって指摘された。また最近 P. A. Jorgensen, *Lear's Self-Discovery* (University of California Press, 1967) は *King Lear* の疑問文について見事な解明を試みている。本稿は特に, P. A. Jorgensen に負うところが大きい。
- (3) 本稿が拠った G. I. Duthie と J. Dover Wilson による edition は, この line に question mark ではなく, comma を施している。この line は Tell me, my daughters に続く命令文であると考えられる一方, 他の edition に従って独立した疑問文とも考えられる。
- (4) 引用は *The New Shakespeare, King Lear*, ed. G. I. Duthie and J. Dover Wilson (Cambridge, 1962) による。
- (5) W. H. Clemen, *The Development of Shakespeare's Imagery* (London, 1951; 1963), p. 134.
- (6) M. D. H. Parker, *The Slave of Life, A Study of Shakespeare and the Idea of Justice* (London, 1955), p. 20.
- (7) P. A. Jorgensen, *op. cit.*, p. 98.
- (8) Terry Hawkes, "'Love' in *King Lear*," *RES*, X (1959), 179.
- (9) G. L. Kittredge による註, *The Arden Shakespeare, King Lear*, ed. Kenneth Muir (London, 1963).

- (10) G. W. Knight, *The Imperial Theme: Further Interpretation of Shakespeare's Tragedies Including the Roman Plays* (Oxford, 1931; 1954), pp. 28-30.
- (11) T. W. Craik, *The Tudor Interlude* (Leicester University Press, 1962), p. 73.
- (12) G. I. Duthie and J. Dover Wilson. 編者はこの注目すべき註を George Gordon, *Shakespeare's Comedy and Other Studies* (Oxford, 1944), pp. 126-128 より引用している。